

今、北京を語ることの意義

—劉一達著、李濱声イラスト、日中翻訳学院本書翻訳チーム訳『悠久の都 北京——中国文化の真髓を知る』—

In-depth Descriptive Analysis of Modern-day Beijing

— Liu Yida, *Dao Beijing (On Beijing)* —

米井 由美

YONEI Yumi

要旨

今回、劉一達著、李濱声イラスト、日中翻訳学院本書翻訳チーム訳『悠久の都 北京——中国文化の真髓を知る』（日本僑報社、2022年9月28日出版）に共訳者の一人として参加した。新聞記者である劉氏は生粋の北京っ子であり、北京の文化や風俗、方言を題材とした小説やエッセイを数多く出版し、その中にはドラマ化や舞台化されたものもある。また、いくつかの作品には邦訳がある。イラストを担当した李氏は中国における諷刺漫画の先駆けであり、中国アニメ・漫画業界で最も栄誉のある「金猿賞」を受賞した人物である。両氏とも長く北京に居住し、それぞれ文章やイラストで街の変化や人々の姿を読者へ伝えてきたように、現代の北京を描くにはこの上ない人選であると言える。その二人がタッグを組んで誕生したのが本書である。なぜ今この時期にそのような書籍が出版されたのか、今北京を語ることにどのような意義があるのかを本書に関わった者として考えてみたい。

●キーワード：北京 (Beijing) / 劉一達 (Liu Yida) / 李濱声 (Li Binsheng)

2022年8月25日、韓国にて開催された第13回文化疎通フォーラム (CCF) にテレビ会議で参加したあるフランス人学者は、「都市の風景が高層ビルを中心に変わっていくのは、世界的に起きる災難的現象だ」として、北京を例に挙げて以下のように述べた。「北京は過去を壊し、中国文化といかなる関係もない外国建築家を呼んで都市に高いオブジェを建てた」。¹⁾

私はこれまで二回、2006年冬と2014年夏に北京を訪れたことがある。当時からすでに中国は経済発展が目覚ましく、特に首都である北京に対しては、胡同 (横丁や路地) などの古い街並みと北京商務中心区 (Beijing Central Business District) 周辺の高層ビル群に象徴されるような新旧の顔を持つ街という印象を抱いていた。しかし、今回ご縁があり、劉一達著、李濱声イラスト、日中翻訳学院本書翻訳チーム (参加者 米井由美、福田櫻) 訳『悠久の都 北京——中国文化の真髓を知る』（日本僑報社、2022年9月28日出版。原題は『道北京』、北京：人民出版社、2018年）を共訳者の一人として翻訳させていただく機会に恵まれ、北京の街の移り変わりやそれにとともなう人々の心情に触れたことで、先に紹介したフランス人学者の指摘に首肯せざるを得なかった。

著者の劉一達氏は1954年に北京で生まれた生粋の北京っ子である。新聞記者として北京の文化や風俗、方言を題材とした小説やエッセイを数多く出版し、その中にはドラマ化や舞台化されたものもある。邦訳された著書に『北京の子 人虫児』（近藤昌三訳、朱鳥社、2008年）、『乾隆帝の幻玉 老北京骨董異聞』（多田麻美訳、中央公論新社、2010年）がある。

イラストを担当した李濱声氏は1925年にハルピンで生まれた。1949年、天安門広場に掲げられているかの有名な毛沢東の肖像画を描いた人物である。その後『人民日報』の人気コラム『風刺とユーモア』にて長年作品を発表し、中国における諷刺漫画の先駆けとして、これまでの功績を称えられて中国アニメ・漫画業界で最も栄誉のある「金猿賞」を受賞した。

そのように劉氏と李氏を紹介すると、文字とイラストで現代の北京を描くにはこのうえない人選であることがおわかりいただけるだろう。なお、両氏は原書の『道北京』のほか、『北京老規矩』（北京：中華書局、2015年）、そして『北京話』（北京：中華書局、2016年）でもタッグを組んでいる。

『悠久の都 北京——中国文化の真髓を知る』は、全三章で構成されている。

第一章「知られざる北京の真髓」は、「北京城の城門」、「北京における「城」と「区」の概念」、「胡同の趣」、「大雑院での人生模様」、「花市のルーツを尋ねる」、「広外地区を顧みる」、「白塔を静観する」、「北京の橋」、「北京市の樹・槐の古木」、「会館と会所」という10篇から成る。

第二章「変わりゆく老北京の姿」は、「商業の命脈である老舗」、「廟会の今と昔を探る」、「花会風雲録」、「味わい深い商品が並ぶ合作社」、「公衆トイレに出入りする」、「花屋から歴史を振り返る」、「当時の護城河に思いを馳せる」、「皇都の柳」、「紫竹院の印象」、「秋色の香山で紅葉狩りをする」、「オタマジャクシを飲む」、「懐かしき「小人書」、「映画に夢中だった少年時代」という13篇から成る。

第三章「文化の源は北京にあり」は、「胡同特有の雰囲気」、「「玩」の意味を再考する」、「北京の古いしきたり」、「元宵節のルーツを探る」、「北京人と春龍節」、「中秋節に月を愛でる」、「大晦日の過ごし方」、「年夜饭（年越し料理）の流儀」、「祖先を祭り、祖先を想う」という9篇から成る。

そして随所に李濱声氏によるイラストが散りばめられている。第一章「胡同の趣」(33頁)では、四合院の中庭でおじいさんが孫たちと一緒に金魚鉢の中を覗く姿が描かれている。その上部には日除け棚とザクロの木もある。これらはまさに北京っ子が理想だと考える生活風景である。

第二章「廟会の今と昔を探る」(147頁)では、春節の風物詩、「廟会」(縁日)の様子が描かれている。見物客のほか、唐独楽、風車、凧、金魚鉢、生花、糖葫芦(飴掛けたサンザシなどの果物の串刺し)も確認できる。廟会の盛況ぶりが伝わってくる。

第三章「中秋節に月を愛でる」(301頁)では、中秋節の縁起物、「兎兎爺」(兎頭人身の蠟人形)を売る店主とそれを買い求める子どもたちの姿が描かれている。医療環境が悪かった時代、「兎兎爺」を飾ることで家族の健康と安全を願った。

ここで挙げたものはほんの一部に過ぎないが、どのイラストも暖かく柔らかな筆致で描かれており、読者をほっこりした気持ちにさせるだろう。

本書では、万里の長城、天安門広場、王府井(北京で有名な大通り)など、“北京”と聞いて連想されるような観光名所を紹介するというよりも、様々な角度から古き良き北京を捉えるのが劉氏の狙いだと言える。

その上で、北京へ行ったことがない人、行ったことがあってもゆっくりと観光できなかった人、さらには北京で生まれ育ったが古き良き北京を知らない人に対し、劉氏は本書を読めば「北京に行って理解したのと同じようにその歴史や今日の姿を知ることができる」(6頁)、「私が皆さん連れて街を巡るので、北京についてさらに理解が深まるはずである」(同)、「私が時空を越え、百年余り前の北京へお連れして、ゆったりと散策することができる」(同)と断言し、読者をその世界へと誘っている。

第一章「知られざる北京の真髓」の「広外地区を顧みる」では、劉氏と友人らとのエピソードから街の大きな変化が感じられる。以前広外地区は小紅廟とも呼ばれ、その最寄り駅の近くには悪臭のする川があった。劉氏曰く「夏、この辺りはハエと蚊の天下で、川の悪臭はひっくり返るほどである」(86-87頁)。1980年代の初め、劉氏はその地にある職業学校で副校長をしていた。学校の隣にある宿舎には誰も住もうとはしなかったが、「将来この一帯が取り壊され改造されると思った」(88頁)劉氏は住む所に困っていた新婚の教師へそこに住むようにすすめた。1995年頃、劉氏はその教師にばったり会った。彼はあの時のおかげで現在は立派なマンションに移り住むことができたことと謝意を述べた。劉氏の予感は的中したのだ。

劉氏は職業学校へ勤めていた当時、社会人大学で学んでいた。楊君というクラスメイトと親しくなったが、卒業後に彼はカナダへ向かい、やがては家族を呼び寄せ、カナダ国籍を取得した。

時は流れて2003年、中国でSARSが流行していた頃、劉氏はある友人宅へ招かれた。その車中、目に映ったのは「広い道路の両側には高いビルがそびえ立ち、大型スーパー、高級レストラン、ネオンサインの明滅」(90頁)だった。その地こそ、誰も住みたがらなかったあの「広外」なのである。友人は投資目的で一軒買うようにすすめてきたが、劉氏は断った。

2010年、広外地区はさらに発展し賑やかな商業地区になっていて、友人は以前のマンションをすべて売り払い、もっと高級な居住区へ引っ越していた。友人にご馳走になった帰り道、劉氏は突然楊君を思い出した。不動産転売で財を築いた友人のような才覚が楊君にあったのだろうか。「しかしどう考えても彼はそうならなかった気がする。(中略)もし彼にその才覚があれば、決して早々に広外を離れたりしなかっただろう」(94頁)と劉氏は結んでいる。

街の大きな変化という視点で見ると、「大雑院での人生模様」や「花市のルーツを尋ねる」でも哀感が漂っている。「大雑院」とは中国の伝統的な建築様式である四合院の中庭に雑居している状態の住まいのことを指す。「砕けたレンガとボロボロの瓦、割れたアスファルト。高さの揃わない小さな家と重なって足の踏み場もない場所。雨に出くわすと雨漏りをして、大雑院の中は川となる」(57頁)と劉氏は述べている。一見すると違法建築のようだが、それももう長くは持たないのかもしれない。なぜなら、「首都は発展し、高層ビルが一棟一棟切り立つにつれ、大雑院は歴史の中の古い記憶となりつつある」(67頁)からだ。

花市の「花」は、清の時代、北京の女性たちが好んだ簪の花もしくは絹製の造花のことを指す。当時、火神廟の縁日で絹製の造花がよく売られていたことから、花市と呼ばれるようになり、後にそれが地名として定着した。造花を扱う店が千店舗以上集まり、華やかな通りであったことが「旧都文物略」という書籍にも記されている。その後、1960年代から1970年代になると、花市は主要な商業街の一つとなった。

しかし、それも今や大きく変わってしまった。「花市は北京でも住民が密集している地区の一つである。現在大規模な建て直しが行われ、花市の住民たちはマンションに引っ越して、昔の雑然としてボロボロだった大雑院に別れを告げた」(79頁)とある。劉氏は再び花市へ訪れたものの、「全てが時代の隔たりを感じさせ、一切が見知らぬものになっていた」(80頁)。

先に登場した楊君のように、北京を離れた友人に対しても劉氏は思いを馳せている。第二章「変わりゆく老北京の姿」の「紫竹院の印象」(218-227頁)では、画家である友人との思い出が語られている。その友人は四川省出身で、竹を描くことに長けていた。劉氏は彼とともに紫竹院公園へ向かったものの、竹を見つけることはできなかった。本来竹は江南地方のものであり、北方に位置する北京では大変珍しい存在で栽培が難しかったが、園芸師たちの尽力により、園内に竹が生い茂るようになり、現在では名実ともに華北第一の竹園となった。久しぶりにそこを訪れた劉氏はその友人を思い出し、携帯電話を手に取り写真を何枚も撮ったが、友人はすでにカナダへ移住し、もう何年も会っていないことから、どうやって写真を送ろうかと思い巡らせたのだった。

北京という街が急速に発展していく中で、人々がその変化にどのような感情を抱き、それにどのようにして適

応していったのかを知ることができるという点では本書はとても貴重である。私はちょうど劉氏の子世代であり、李氏の孫世代でもある“85后”(1985-1989年生まれ)にあたるため、彼らが残した作品を享受できる立場にいられることをうれしく思うが、その時間も限りがあることを思うと物寂しさを感じずにはられない。そして、冒頭で引用したフランス人学者の言葉の通り、北京の「過去」が少しでも多く残されることを願っている。

そこに今、北京を語ることの意義があるのではないだろうか。

注

- 1) 「仏学者「高層ビルで台無しにされる北京…ソウルは半分ぐらい」(中央日報日本語版、2022年8月26日配信、<https://japanese.joins.com/JArticle/294823?sectcode=400&servcode=400>、最終アクセス日：2022年11月14日)